

思い出の公園

緑 っ る

夕暮れが徐々にその身を表し、迎り全体は澁んだように暗くな。た。時計に目をやると時刻は六時を指し、夕焼け小焼けのメロディーと共に公園に散らばっていた園児達は一斉に親の元へと駆け、騒がしかった園内は不気味なほどの静寂に包まれた。ホッと一息つく。紅葉し始めた木々達に彩られた公園はどこか色。ほく、中央にははとしんと大きな木が聳え立ち、葉々の間から冬の光が愛らしく顔を出していた。ここはやはり落ち着く、季節は夏

から秋へと移り変わり、私自身もどこか以前とは違う高揚感を感じていた。あの頃と何一つ変わっていない園内は園児の頃の記憶を蘇らせ私をどこか懐しい気持ちにさせた。母も父ももう世界し私は今一人で生きている。でもここに来ればあの頃と何一つ変わらない情景が私を出迎え、母と父に挟まれた満面の私がか古き思い出として私の胸を締め付ける。あの頃と街並みは変わり、私の身近な人間関係も、そして私自身も変わってしまった。でも

ここは変わらない、その事実だけが私を安心させ私の目を潤ませた。

懐かしさを感じさせるような情景と大きくなっていくことで変わってしまうもの、ありふれたものではありますか、切なさを感じました。



ユーフォ

「思い出の公園」のコメント

読む度に具体的な情景が鮮明に浮かび上がってくるのが良かったです。私も小さい時によく近くの公園に遊びに行っていた為、たまにその公園に立ち寄ると昔の事を思い出すことがあるのでよくわかります。

(主人公みたいに両親は他界しておらず、私の場合は母親のみ他界しています。)

りっさん

